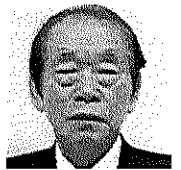




白 門 板 橋

2005. 3. 10 VOL. 23

編集 中央大学学員会 東京板橋区支部
発行 〒175-0082 板橋区高島平2-23-3-101 TEL03-3550-3300



■新春のこめいしー

他支部との積極的交流を推進

支部長 小日向 孝介

二〇〇五年、おめでとうございます。

昨年暮れの降雪のお陰で、清新な気分が新年を迎えることができました。それにしても、昨年は国内外で想像を絶する自然災害が相次いで発生いたしました。突如被害に遭われた多くの方々からのお見舞い申し上げますと同時に、一日も早い復旧と国際的規模での防災対策の確立を願って止みません。

正月恒例の箱根駅伝は、期待のルーキー・上野君の予想外の大ブレイクでやきもきしましたが、その後の追い上げで総合四位に食い込めたことは、野球部やボート部の優勝とあいまって、スポーツ中央大学の名を大いに高めてくれました。その他、政官界では、内閣改造時の副大臣に五名の選任や高検検事長一名の就任など、注目すべき学員の活躍もありました。伝統復活の著しい国家試験においても、司法試験で百二十一名、公認会計士試験で七十六名の合格者を輩出することができました。

今年板橋区支部は、創立十七年目を迎えることとなります。周囲を取り巻く環境は、発足当時とは大きく変わりつつあります。これを機会に執行部に諮って、内部組織の再検討を進めたいと考えております。また、都区内支部協議会や他支部の周年行事に参加して、周辺や関連支部との協調関係を積極的に維持して参りたいと思います。そして、大学本部や地域行政の協賛を得ながら、時局講演会などを実施することも考えております。

新しい年が、会員各位並びに当板橋区支部にとりまして、飛躍的に発展する一年であることを祈念して挨拶いたします。

(「新春の集い」支部長メッセージより)

支部ニュース

六十九名が新春を祝う

支部恒例の「新春の集い」が去る一月二十二日（土）午後六時から、区立文化会館・大会議室で開催された。会場には新調した横断幕と豪華な盛花が飾られた。BGMが流れる中、総勢六十九名の会員が集い、盛大な新年会となった。



小日向支部長から新年の挨拶をいただいた後、関常任幹事の

発声で乾杯！歓談に入り、大野事務局長から新調した「新春の集い」の横断幕披露が行われるなど、なごやかに進んだ。

従来の集合写真に代わり、今年も趣向を変えてブロック別に記念撮影をし、写真班は大わらわ。

新人会員と初参加者の紹介を挟んで、カラオケを楽しんだ後、途中から駆け込まれた石塚顧問（区長）に挨拶をいただき、宴たけなわとなる頃、恒例となった「校歌」「応援歌」「惜別の歌」の三セットを全員が合唱し、岩澤副支部長の三本締めで、別れを惜しみながら散会した。（池田記）

盛大に忘年会

一昨年からの支部の公式行事になった「忘年会」が、去る二月一日（土）午後六時から、蓮根「よし邑」を会場に開かれた。

当日は、四十四名の会員が出席し総会に次ぐ賑わいで、よし邑さん自慢の重ね弁当を開き、持ち寄った各地の銘酒で盃を交わし、カラオケまで楽しんだ後、恒例の「惜別の歌」を合唱して、一年を締めくくった。（金子記）

■秋の旅■

海の幸を堪能した旅

支部・秋の旅は、当初計画した越後・湯之谷村で湯量豊富な大湯温泉のかけ流しの湯をたっぷり味わう筈だったが、中越地方を襲った大地震で、急ぎよ東伊豆の片瀬温泉に変更して実施された。太平洋を望む大浴場でひと汗流し、あわびの踊り焼きや金目鯛の煮付けに舌鼓を打った後は、お定まりのカラオケを楽しみ、「惜別の歌」でお開き。



翌日、まず伊豆高原の池田美術館を訪ねて目の保養をし、蓮着寺

と十国峠から箱根新道を経由して小田原城を巡り、晩秋の伊豆・箱根路の旅を満喫して帰京した。（金子記）

支部有志がベトナムに遊ぶ

に遊ぶ

去る二月十六日から三泊四日の日程で、平山副支部長を団長とする支部有志九名が、昨年鳥イ



ンフルエanzaで泣く泣く中止したベトナム旅行を復活実現したものの、ベトナムは、北部のハノイを旅したが、戦禍の跡も消えて平和そのもの。世界遺産・ハロン湾のクルーズは、中国の呉勝地・桂林にも勝る景観だった。（H記）

母校のニュース

司法試験五位に終わる 会計士試験は四位

平成十八年度の国家試験は、司法試験が百二十一名の五位。公認会計士試験が七十六名の四位と、健闘空しくいずれも昨年と同じ順位に終わった。

入学志願者が減少

小子化の影響を受け、他大学の志願者が減少するなか、過去五年連続して志願者を増加させてきた中大だが、本年度は法学部、経済学部が減少したため、文学部と総合政策学部の増加があったものの、差引約一千名の減少となった。

大学キャンパスに都心回帰の兆しが見えるだけに、多摩キャンパスが敬遠されたものか？

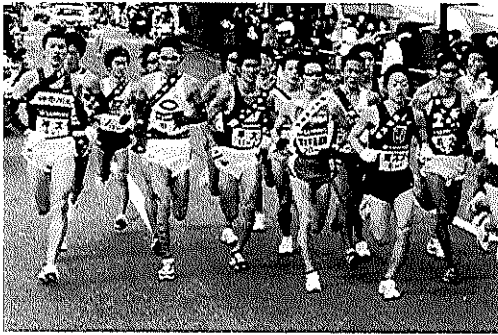
なお、全志願者数は、六万五千五百名（法学部三月試験分除く）と発表されている。

箱根駅伝一秒差に泣き四位

■箱根駅伝

第八一回・箱根駅伝大会は、久しぶり優勝候補の一角に名を連ね大いに期待されたが、初日一区で新人・上野選手が体調不良でブレーキとなり、初日にして夢を断られた。しかし、他の選手が健闘して、復路は僅差の二位に食い込み総合で四位を確保した。

今年は終始苦しいレース展開の中で、区間賞一人、区間二位に三人を出すなど、内容的には大いに健闘したレースだった。



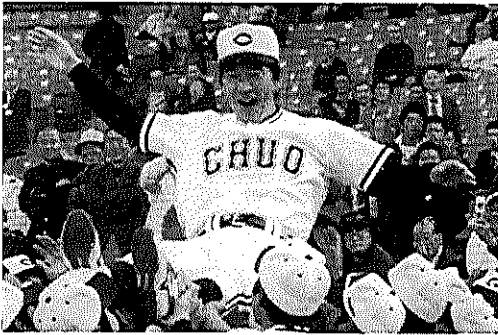
▲1区を走る上野選手

二十五年ぶり優勝

■東都大学野球

東都大学野球・秋季リーグで、母校中大が二十五年ぶりに優勝した。春季リーグで準優勝を飾ったものの、初戦で青学大に連敗でスタートしただけに、暗雲が漂ったが、一戦目以降を勝ち続け宿願の優勝を遂げた。

エース会田が健在なだけに、今シーズンも連覇が期待される。成績は次の通り。
二位青学大、三位日本大、四位駒大、五位亜大、六位東洋大



▲清水監督を胴上げする中大ナイン

お見事十一連覇達成

■全日本学生水泳選手権

昨年九月、相模原市立総合水泳場において行われた全日本学生選手権水泳競技大会で、母校中大水泳部が圧倒的な強さで十一連覇を遂げた。

勝利の要因は、リレー全種目を制覇したことにより、根底にあるのは選手層の厚さ、総合力だった。過去に日大が十連覇しており、それを破る記録を樹立したことになり、まさに偉業と言える。
(栗原記)

寄付金申し込み 進展なし

母校中大の百一十五周年記念事業募金で、当板橋区支部からの寄付金申し込みは、昨年末で、三百七十九万円で、進展はなかった。
(池田記)

告知版

▼支部観校会

八年ぶり
屋形船で

支部恒例の観校会の日程が、次のとおり決定しましたので、お知らせします。

記

日時 四月一日(土)
午後一時から

会場 隅田川・屋形船

会費 一〇、〇〇〇円

担当 区外ブロック

(久米、平山)

申込み 別紙で三月二十五日迄



▲8年前の屋形船・宴会シーン

▼支部定時総会の日程

第17回・定時総会の日程が、次のとおり決定しましたので、お知らせします。

記

日時 六月四日(金)
午後六時から

会場 区立文化会館四階
大会議室

▼ホームカミング・デー

第16回・ホームカミング・デーの開催日程が、次のとおり決定しましたので、お知らせします。

記

日時 一〇月三日(日)
午前一〇時から

会場 中大・多摩キャンパス

対象 全卒業生

*従来は、卒業して二十五
年、五十年の節目に当
たるOBが対象でしたが、
昨年からの新方式に変更
されました。

(『学員時報』より)

▼「横断幕」を新調

定時総会と新春の集い(新年会

に使用する横断幕の傷みが酷く
なったため、このほど新調し、新
春の集いには、早速会場に真新し
い横断幕が披露された。

なお、六月の総会でも総会の横
断幕が披露されます。



■年会費納入のお願い

年会費は、支部運営の
源泉です。まだ未納の
方は、同封しました「
払込取扱票」で納付下
さるよう、お願い致し
ます。(会計・幹事)

■TOPICS

田

亀井選手巨人入り

*

五十一季ぶり24度目の
頂点にたった母校・中大
野球部の主将・亀井義行
(商)選手が、昨年十一
月にドラフト四位で読売
巨人軍に入団した。



高橋(由)、ローズ、

清水と新外人が競い合う
外野陣に割り込めるかが
心配だ。心配といえは、
先輩の阿部慎之助選手に
次いで、巨人ファンには
堪らない朗報だったが、
まさか栄養費をもらって
いないだろうネ?それが
気になる。(H記)

越後の旅を東伊豆に変えて

■秋の旅行記■

■初日

二〇〇四年を象徴する漢字は

「災」だった。猛暑、台風、水害、地震と、それこそ天災の揃い踏みで、止めは、インド洋沿岸諸国を襲った大津波。残念ながら、日本人犠牲者はまだまだ増えそうだ。

支部秋の旅行も、この「災」に振り回された。当初の計画では、新潟県北魚沼郡湯之谷村で日本一旨いという評判の米と、湯量豊富な大湯温泉のかけ流しの湯をたっぷり味わう筈だった。ところが十月二十三日に、中越地震が発生。その後も余震が頻発し、交通網はズタズタに寸断されたまま。やむなく目的地が東伊豆の片瀬温泉に変更され、宿も急ぎよ確保した。

■災い福とならず

十一月十三日(土) 午前八時 総勢二十八名を乗せた貸しきり

バスが板橋グリーンホール前を定刻に出発。

小日向支部長の挨拶、校歌、応援歌を斉唱の後、岩澤副支部長の発声で乾杯。車内の熱気は一気に盛り上がった。

首都高、東名、小田原厚木道路西湘バイパスを経由して熱海へ。お宮の松に近い食堂で、昼食をす



ませた後に、神隠しとでも言うべき災難に見舞われて、幹事団は顔面蒼白。参加者一名の所在がつかめず、やっと合流できたのが、二時間半後。ホッと胸を撫で下ろしながら、南熱川東映ホテルへ直行した。

太平洋を望むホテル自慢の大浴場は、週末とあって団体客や家族連れで賑わっていたが、まずはひと汗流してから宴会場へ。

あわびの踊り焼き、金目鯛の煮付け、新鮮な刺身の数々と伊豆ならではの海の幸に舌鼓を打った。腹が満たされ、アルコールもたつぷり全身に回ると、当然カラオケの出番。「惜別の歌」でお開きを迎えるまで、宴会のボルテージは昂まる一方だった。

■二日目
朝寝、朝湯の満ちた表情で前夜の宴会場に参集した面々は、朝酒にもありついて、すっかり小原庄助さんになり切っていた。

ホテルを出発して、まず訪れたのが、芸術の秋にふさわしく、一碧湖に近い池田二十世紀美術館。ルノワール、ピカソ、マチス、

シャガール、ミロなどの他、日本の異色作家の作品およそ二百余点を収蔵。

この日は「にんげんいろいろ 五千の世界」と銘打った特別企画展が催されていた。案内に立った女性学芸員に鋭い質問が浴びせられ中大OB・OG健在な裏を実証していた。

富戸海岸にある蓮着寺は、日蓮上人配流の地に建立された名刹。打ち寄せる波も耳に心地よく境内に咲き誇る山茶花とあいまって、晩秋の穏やかな一刻を楽しませてくれた。

十国峠のレストハウスで昼食と土産購入。大学駅伝での母校の健闘を祈りながら、箱根路を下って小田原城へ。

後北条氏の滅亡と、太閤秀吉の栄華に想いを馳せながら城址公園をそぞろ歩くと、晴れ着に着飾って七五三を祝う子供連れが多く、このバス旅行を明るく彩ってくれた。

予定より早く板橋区役所前に帰着。中越地震被災地のかたがたのふんばりを祈りながら、家路についた。
(金子記)

隆慶一郎 文学拾い読み(二)

『一夢庵風流記』

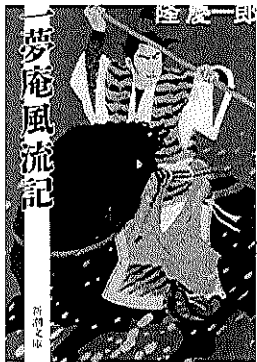
著者／隆慶一郎
発行所／株式会社新潮社

■著者プロフィール

略——(前号を参照下さい)

遅咲きの作家・隆慶一郎は、時代小説「吉原御免状」で華々しくデビューしたが、六十六歳の若さで早世し、亡くなるまでに二十点の作品を遺した。前号で遺作となった「見知らぬ海へ」を取り上げたが、「吉原御免状」、「かくれさと苦界行」など、もう書店にはないと諦めていた隆作品が友人から届いて、昨秋以降ドブプリと隆文学にはまってしまった。

そんな流れの中で、古書店から隆文学の代表作とも言える「一夢庵風流記」を入手した。再度探り上げるしかない。



松風 **

～中略 馬小屋に甲高いなきの音が起こり、次いで馬囲いの板がけり破られる音がした。慶次郎が伴侶のように愛している松風という悍馬の声だ。

慶次郎が合戦で一騎駆けを繰り返して、今日まで無事にいられたのは、半ばはこの松風のお陰である。並の馬の倍近い速さを持ち、馬体も大きく、戦闘力も抜群である。蹴り、噛み付き、体当たりし、並の馬など押し倒してしまうし、

徒歩の人間は馬蹄にかけられて、死ぬ者さえある。元来が野生馬であり、異常に癪が強く、慶次郎以外の人間は誰も乗せない。

何人がかりかで抑えつけて(それも中々むずかしいのだが) やっとまたがる事が出来たとしても、抑えがはずれたら最後猛然と暴れ出し、乗った人間はあつという間に振り落とされてしまう。

実は前田利家が一目見て松風に惚れ込んでしまい、譲れと言ってきたが、慶次郎は右の事情を述べて拒否している。～略

筆致は藤沢周平など他の時代小説作家と余り変わるところはないが、隆文学の魅力は、主人公に採りあげる人物が歴史的にも知名度が低く、敗者に属するが、時の権力に迎合せず自由に生き抜いた逞しい男で、前田慶次郎はその数少ない男の一人と言える。

合戦・決闘・色恋交えて描く痛快時代長編で、最近になって新潮社から文庫本で刊行されている。デビュー作の「吉原御免状」と続編の「かくれさと苦界行」をセットで読むと、誰もが隆文学にはまることだろう。

(平山記)

大相撲一月場所
中大出身力士の星取表

出島関が勝ち越す

○○○

▽豪風(尾車)

本名・成田 旭 平14卒

西前頭8枚目 全休

▽出島(武蔵川)

本名・出島武春 平8卒

東前頭十枚目 9勝6敗



▽玉春日(片男波)

本名・松本良一 平6卒

西前頭十四枚目 7勝8敗

▽魁道(友綱)

本名・田中康弘 平10卒

東十両11枚目 6勝9敗

▽中尾(松ヶ根)

本名・中尾浩規 平7卒

幕下東13枚目 3勝4敗

(池田記)

■ベビーブームに起因

弥生町は、昭和三十一年百川牧場の跡地に開校した弥生小学校に因んでつけられた地名である。昭和三十四年六月、それまでの上板橋一丁目と九丁目を弥生町に変更された。

決まったそうである。

徳川時代に石神井川に架かっていた橋は、板橋宿の板橋とここ弥生町の下頭橋だけであった。

「下頭橋」(げとうばし)と呼ばれるようになったのは、寛政十年(一七七八)頃と伝えらる。

橋名の由来はいろいろある。

一つは、出府下向する川越藩主を送迎する藩士が、ここで挨拶の

■乞食六蔵という人物

乞食六蔵は、昔何処からともなく流浪の旅から、この石神井川のほとりに掘って建て小屋を建てて住んでいた。彼は外見とは違って内面は清浄な気高い人であった。

ある時、旅の僧が岸に立って、「この川に丸木が二本だけとは、

さぞ旅人が難儀をすることであろう。」と独り言を言いながら小屋

を見た。横になっっている人は、すでに亡くなっていることは分

かったのだが、この乞食の入寂の態度に驚き、葬ってやった。

すると、彼の胴巻きから沢山の金子が出てきたので、これで石橋を架けた。

この旅の僧が、橋の竣工と一周忌を済ませ出立の時に、石碑

の脇に差した榎の杖から芽が出て立派な木になった。「逆さ榎」と言われている。

この話を知った佐藤八十亀氏と河原金五郎氏が中心となって、六蔵祠、下頭六蔵菩薩之塔が昭和四年に建立された。揮毫は民族主義者、書家としても高名な頭山満翁

のものである。

下頭橋と六蔵祠は、昭和六十一

年に、板橋区の記念物に登録されている。(中三川記)



編集後記

●：サッカーW杯アジア最終予選の初戦、北朝鮮との戦いは一対一の同点で引き分けるかと思われた後半のロスタイムで、奇跡的にゴールを決めた日本。箱根駅伝では、一秒差で四位にいた中大。勝負の世界は、実に厳しい。

●：作家・隆慶一郎の作品を再掲したのは、早世が惜しまれるからで、主人公が時の権力に迎合せず、自由に生き抜いた逞しさに共感が大きかったからだ。

●：シリーズ「地名の由来」は、今回も楽しく入力させてもらった。弥生・三月から、もうすぐ桜の季節の「卯月」だ。石神井川の辺りに咲く桜が、今から待ち遠しい。(平山記)

地名の由来…⑮

「弥生町」の巻



頭を下げたという説であり、もう一つは、宿場の人々が度々の出水に難渋して、石橋を造ろうとした

が、資金が足りないの頭を下げて近隣の村々を回り、金を集めた

からだという説がある。また乞食六蔵(通称)が、永年旅人からの

喜捨を貯えて石橋を架けたことによるという説もある。

弥生小学校は、上板橋小学校の児童数が急激に増加したために新設された学校であるが、校名を決める際、近くを流れる石神井川の干手に咲く桜が大変美しいところから、「春の弥生が

良いのでは」「ないかとして、